

生目地域の文化遺産 (生目地域自治区管内)

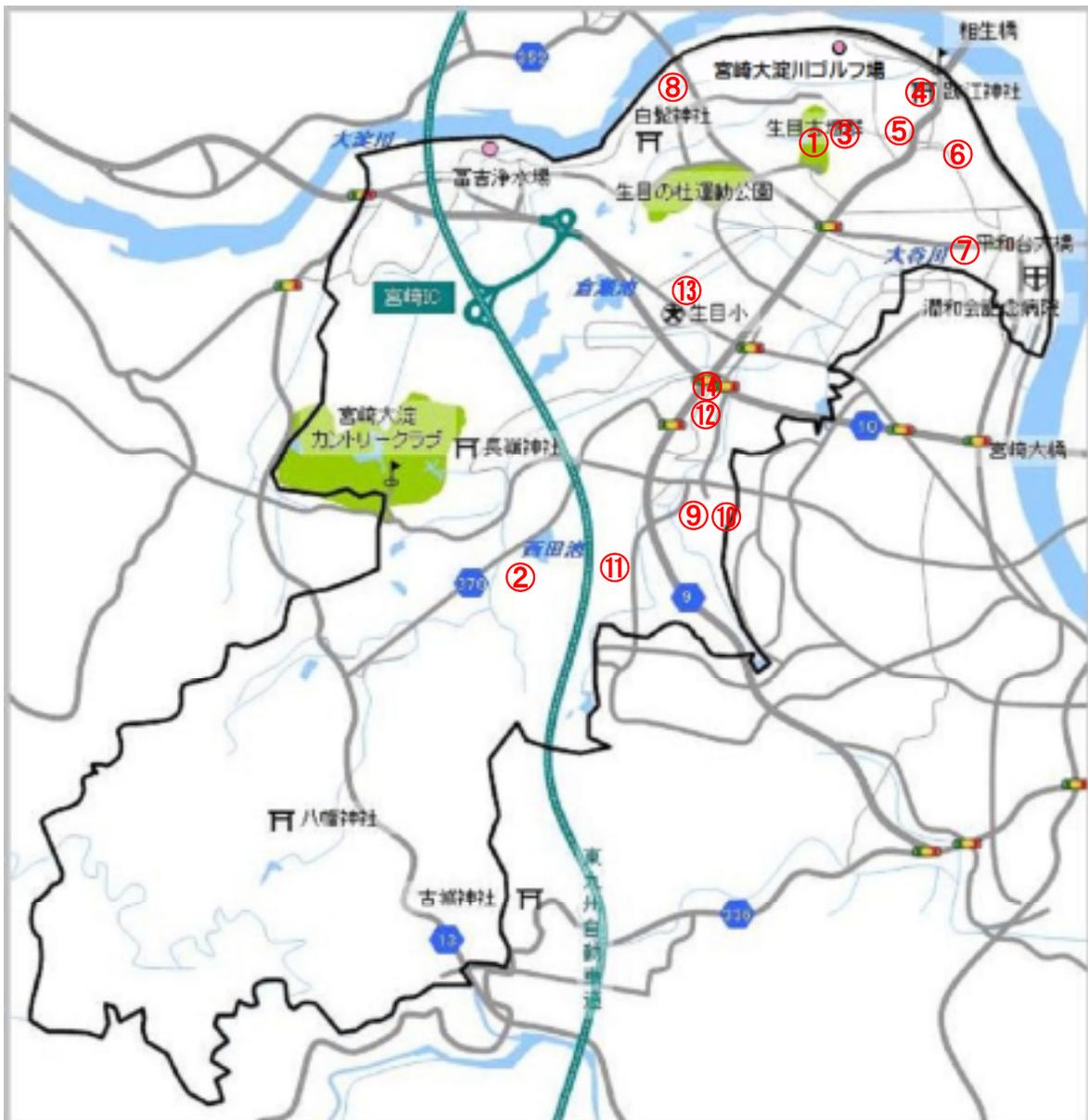
【地域の歴史と特色】

生目地域は、大淀川の右岸に位置し、北東部の標高20m前後の丘陵上には、国史跡に指定されている生目古墳群があります。

古代には、宇佐八幡宮の荘園であった浮田庄として開発され、鎌倉時代末期には、庄内に「生目方」「跡江方」「小松方」の名が見えます。南北朝期には、浮田庄も争乱に巻き込まれ、跡江や高浮田で合戦が行われました。

江戸時代には、生目村・浮田村・小松村・跡江村に分かれ、幕府領となった一時期を除き、延岡藩が領する地域となりました。

【文化遺産マップ】



いきめこふんぐん

① 生目古墳群（国史跡）

生目古墳群は、昭和18年（1943）に前方後円墳7基と円墳36基の合計43基が指定を受けています。

中でも古墳時代前期の長さが100mを超える前方後円墳3基（1号墳、3号墳）は、同時期の九州の首長墓でも突出した存在であり、強力な力を持った豪族がこの時期、大淀川下流域にいたことを示しています。

近年の発掘調査では、前方後円墳に伴う地下式横穴墓等が発見され、南九州の古墳時代の墓制を研究するうえで重要な事例となっています。

平成20年には、生目古墳群史跡公園として整備され、隣接する生目の杜遊古館では、生目古墳群や市内の遺跡から発掘された土器等の出土遺物が展示されるなど、市内の遺跡について学ぶことができます。



いきめそんこふん

② 生目村古墳（県史跡）

県指定の生目村古墳は昭和19年には指定を受けており、現在、細江に円墳が2基、浮田と富吉に横穴13基が確認できます。

昭和42年（1967）には未指定の横穴が生目地域センター北側の丘陵で発見され、故石川恒太郎氏らによって調査されています。この時の調査では、直刀や鉄鏃、須恵器の高坏などが出土し、6世紀中頃から後半に築造されたと考えられていますが、宅地造成によって現在は消滅しています。



あとえかいづか

③ 跡江貝塚

跡江貝塚は、生目古墳群の東麓に所在する縄文時代早前期の貝塚で、昭和39年から同45年にかけて数回にわたり発掘調査が行われました。上層はハイガイを主として厚さ約20cm、下層はシジミを主として厚さ約50cmほど堆積し、貝類のほか獣骨・人骨・土器・石器などの遺物が出土しました。現在、その痕跡はほとんど残されていませんが、当時の海岸線を知る上で貴重な遺跡とされています。

あとえじんじゃ

④ 跡江神社

伊勢の豊受皇大神を祀り、古くは神明宮と称しました。社伝によれば、寛元4年(1246)の創建で、その後、天文16年(1547)に再興され、神社所蔵の棟札には、大檀那に伊東義祐の名が記されています。

江戸時代には、延岡藩の庇護を受け、寛永11年(1634)の棟札に大檀那として延岡藩主有馬康純の名が記されています。明治初年には跡江神社と改称し、村社に列せられました。

豊年踊りは、旧暦8月7・8日の2日間、五穀豊穰を祈願して、地区内の各神社や希望する個人宅などで踊られる祈祷踊りです。

また、三拍子(さんべし)踊りは、老若男女の別なく地区民総参加で、顔を隠して変装し、男性が女性に扮装するなどして、夜を徹して賑やかに踊る芸能です。豊年踊りが昼間に踊られるのに対して、三拍子踊りは夜の部の踊りとして親しまれています。

これらの踊りは、戦時中に途絶えていましたが、昭和55年(1980)に保存会が結成され、現在も伝承されています。

民俗芸能 三拍子踊り・豊年踊り



はんぴどんのはか

⑤ 半平どんの墓

半平どんは、民話の中に登場するとんち者で、「ゴゴの酒」「つくらん魚」「邪魔なスリバチ山」など、彼にまつわる民話は数多く残されています。

半平どんは、話の中でつくりあげられた人物といわれていますが、跡江の公園墓地内にその墓が存在しています。墓には「月潤自光居士」「俗名半平」「天明五乙巳年(1785)八月七日」と刻まれており、近くにはその妻と息子の墓も立ち並んでいます。

半平どんとその家族の墓は、元は跡江共同墓地にあり、妻の墓は半平どんの墓より二間(約3.6m)位後方に建てられていました。一説には、生前は夫婦喧嘩が絶えず、「墓を並べて建てちよくと、死んでからも夫婦喧嘩せんならん。嬬(かかあ)の墓は離して建ててくれ」という、半平どんの遺言によったとも伝えられています。



大小の盃

ある日、半平どんは、下北の代官所から呼び出され、何か面白い話をせよと注文せられました。すると半平どん曰く、「私は、今朝、ここに来る途中、道ばたに一疋の小蛇が大きな蛙を吞もうとしちよるのを見ましたので、蛇よ、放せ放せと申しましたら、小蛇は吞まにゃ放さん放さんと言いやした」。

代官は笑って酒を出しましたが、渡された小さな盃を見て、半平どんがシクシクと泣き出しました。怪しんで訳を訊くと、半平どん、「私の親爺も酒好きじやんしたが、小さい盃を喉にひっかけて死にやした。今それを思い出して、つい涙が・・・」と真面目くさって申しますので、ヤレヤレと、今度は大きな盃が渡されました。十分に頂戴した半平どんの舌先は油の乗った如く滑らかに、頓知機な雑談が続々繰り出されて、役人達を喜ばせたことは説くまでもありません。

(日高重孝著『日向今昔物語』より)

きりしまでらあと

⑥ 霧島寺跡

霧島寺跡は、大字跡江字寺にあり、現在跡地の大部分は大淀川の河川敷（ゴルフ場）となっています。

宗派は禅宗で、近くの「寺の前墓地」にある歴代住職の墓石に刻まれた年号などから、17世紀末から18世紀初頭にかけて開基されたと考えられます。

跡地には、わずかに山門跡と仁王像（石造）が残るのみですが、仁王像は、享和元年（1801）3月7日の造立で、古城村出身で真言宗護東寺住職串間円立院の作になります。



わかみやじんじゃ

⑦ 若宮神社

若宮神社は、古くは若宮八幡宮と称しました。創建年代は不明ですが、一説（社伝）には、文治元年（1185）の壇ノ浦の合戦後、日向国宮崎郡に下向した平景清によって勧請されたと伝えられています。

若宮神社がある下小松地区には、「なぎなた踊り」または「志賀団七踊り」と呼ばれる民俗芸能が伝承されています（かつては、旧暦8月14日に若宮神社や地区の有志宅において、他の「大將軍」「清十郎」などの手踊りとともに踊られていました）。

なぎなた踊りの由来は定かではありませんが、昔、武士に無礼打ちになった農民の遺児姉弟が親の仇討を決意し、姉はなぎなた、弟は鎖鎌で武道に励む姿を表現したものとされています。姉弟に扮した踊り手4人1組になって鎌となぎなたを打ち合わせながら激しい立ち回りを演じる勇壮な踊りです。



民俗芸能 下小松なぎなた踊り

もくじぎょうどうさく せんじゅせんげんじゅういちめんかんのりつぞういっく

⑧ 木喰行道作 千手千眼十一面観音立像一軀（市有形文化財）

本像は、江戸後期の行者木喰行道の作になります。

木喰行道は、江戸時代中期に全国行脚をしながら仏像などを制作した人物で、天明8年（1788）から寛政9年（1797）の10年間、日向国分寺（西都市）に住職として滞在し、同寺の五智如来像（県指定有形文化財）などを制作しました。

大きさは、総高53.3cm、像高31.8cm、幅18cmの小像で、彫技は、丸味のある彫り方と台座の扱い方に木喰行道の特色を見ることができます。



古くは生目八幡宮と称し、豊前宇佐宮領の庄園であった浮田庄の鎮守として勧請されたと考えられています。

また、生目神社は「目の神様」として知られています。平家滅亡後に源氏に捕らえられた平景清が、「源家ノ榮達ヲ見ルニ忍ビズ」として、自らの眼をえぐって投げた先が生目であったと伝えられています。景清公の遺徳にあやかり、境内から湧き出る清らかな御神水で眼を洗うと、眼病が治り、目がよくなるということで参拝者も多く、江戸時代に松浦武四郎が著した『西海雑誌』にも「隣国近郷より諸人の参詣絶るひまなし」とその賑わい振りが記されています。



いきめじんじゃのおがたまのき



生目神社のオガタマノキ（市天然記念物）

生目神社本殿の向かって左側にオガタマの巨木があります。

目通り幹囲3.2m、樹高17.5mで、その樹冠は東西約15mに及びます。

県内のオガタマノキは、西都市三宅寺崎と高千穂町岩戸神社境内、そして生目神社のものがよく知られています。その希少価値と古来よりの神木として生目神社に植栽された歴史的意義から、宮崎市天然記念物に指定されています。



いきめじんじゃのくすのき



生目神社のクスノキ（市天然記念物）

生目神社のクスノキは、生目神社本殿の向かって右側にあり、左側にある巨木オガタマノキと対をなしています。

目通り幹囲は8.65m、樹高25mに及ぶ巨木で、希少価値が高く、宮崎市の天然記念物に指定されています。





もくぞうしんのうめん(ほうじにねんめい)つげたりもくぞうしんのうめん(てんぶんごねんめい)
木造神王面(宝治二年銘)附木造神王面(天文五年銘) (国重要文化財)

木造神王面は南九州で最も古い宝治2年(1248)の銘をもち、大型の迫力に富んだ造形であることが注目されています。また、制作事情に八幡神との関わりが想定されることから、中世の地域信仰のあり方を示すものとして、我が国の絵画・彫刻史上特に意義のある資料であるとの評価も得ています。なお、附けたりとして天文5年銘の神王面も指定されています。



宝治二年銘神王面



附天文五年銘神王面



いきめじんじゃもくぞうしんめん(にめん)
生目神社木造神面(二面) (市有形文化財)

生目神社にある木造神面のうち一面は、縦24.4cm、横18.2cm、鼻の高さ11.3cmを測り、生目神社の鬼形面の中では小型のもので、裏の仕上げの状態から、奉納するためにつくられたものと思われます。また、紀年不詳ではありますが、残存する「口六丑年」の銘から、慶長6年(1601)の作と推定されます。

元文3年(1738)銘の神面は、縦30.6cm、横30.2cm、鼻の高さ17.5cmを測る大ぶりの面で、鼻と口は大きく彫られ、肌は朱色に、髪と眉・瞳孔は墨で黒く、歯は白色に塗られています。その特徴から、近世におけるこの種の仮面製作の一端を伺える貴重な文化財であると言えます。



紀年不詳神面



元文三年銘神面

いきめかぐら
〈民俗芸能〉 生目神楽 (市無形民俗文化財)

生目神楽は、生目神社に古くから伝わる神楽で、現在でも生目神社神楽保存会により保存継承されています。

毎年3月15日に近い土曜日の午後から夜半にかけて奉納される半夜神楽で、暮らしの平穏無事を願い、農業への豊作祈願や感謝を包含した作神楽としての意味も有しています。

現在伝承している番付は24番ですが、神招き・神送り・豊作祈願と感謝・無病息災・魔払い等、神々への祈願、人々の願いを折り込んだ神楽の様式をしっかり保持しています。宮崎平野の春神楽の成立・発展過程を知るうえでも重要な芸能と言えます。



いきめずいどう

⑩ 生目隧道

古くから、宮崎市街から生目神社に行くには、大塚町から恋ヶ迫と呼ばれる山越えの難所を通る道が利用されていました。

生目神社へ人力車・馬車等の交通の便のため、明治40年（1907）5月から隧道工事に着手し、ようやく長さ100m前後の平坦道が完成しました。

素掘りのままの荒っぽい感じの内壁のトンネルで、開通後は生目神社の参道としてはもちろん、通勤・通学路としても愛用されたと言われています。

昭和46年（1971）暮から大塚台団地の造成期に入ると、この生目隧道は旧道とともに閉鎖され、団地の下に埋没することとなり、今や当時を偲ぶものもなくなってしまいました。

こむらやくしどうせきとうぐん

⑪ 小村薬師堂石塔群（市史跡）

小村薬師堂の境内及び南側山林中には、県内でも稀な六面石幢や五輪塔、層塔等106基の石塔群が残されています。

笠部に元久元年（1204）の銘をもつ石造層塔や寛喜4年（1232）銘を持つ翁丸塔など、これほどの古い石塔群が一箇所にまとまって造立されていることでは他に類例がないと言われています。

この石塔群は、石造美術史や仏教考古学、仏教民俗学、さらに日本宗教史上の地域性の究明において重要な資料とされています。



みょうえんじあとせきとうぐん

⑫ 妙円寺跡石塔群（県有形文化財）

妙円寺は、南北朝期に創建された日蓮宗富士門派の寺院です。当時は、本山安房国妙本寺（現千葉県鋸南町）から「日向惣導師職」に任じられていた定善寺（現日向市）と密接に関係し、日向国中部における布教活動の拠点となっていたと考えられています。文和3年（1354、北朝年号）の「日睿上人縁起」（定善寺文書）には、定善寺日睿の弟日慶が、本山の日郷の遺骨を妙円寺に持ち帰り納めたことが記されています。

妙円寺跡石塔群は、千仏山本勝寺境内の西側丘陵斜面にある石塔群で、五輪塔681基、板碑546基、その他石造物10基の計1237基を数えます。最も古いものは、板碑では貞治2年（1363、北朝年号）銘、五輪塔では至徳2年（1385、北朝年号）銘のものがあり、室町時代を中心に江戸時代までの石塔群が一箇所に集中しており、県内はもとより、九州内でも類を見ないほど大規模な石塔群となっています。

また、石塔群の中には、門流系図、伊東略系図、長友略系図上の人物名を銘文に記す石造物の存在が確認されており、寺院を取り巻く在地権力の状況を知るうえでも貴重といえます。



いしづかじょう

⑬ 石塚城

『日向記』によれば、応永8年（1401）に門川伊東氏の祐武が石塚城に入城し、島津勢を追い払ったと記されています。

門川伊東氏は、惣領家伊東祐時の七男祐景を始祖とする家で、14世紀末から15世紀頃にはすでに石塚・久津良（現高岡町）・清武など、日向国中部を基盤として活動していました。その後、伊東惣領家の進出により、15世紀中頃には石塚城もその傘下に入りました。

生目小学校の敷地となっている丘陵部が石塚城であったと言われていますが、現状では遺構は残されていません。

あまりだかんのん

⑭ 余り田観音

由緒は不詳ですが、昔、松の大木があり、空洞となっていた根元に観音像が安置されていたと言われています。本尊は千手観音で、現在は2代目の像（石造）が祀られています。

平成7～8年にかけて、国道10号バイパス建設工事に伴う発掘調査が実施され、五輪塔37基、板碑12基が確認されました。最も古い紀年銘をもつものに、永正10年（1513）の板碑があります。中世高蟬城の東にあたり、妙円寺に近い位置にある石塔群として、今後の研究が期待されます。

